

目的 フランスの父親について、その幼児に対する養育行動態度がどのようなものであるかを確かめ、この結果を日本の父親のそれと比較し、両者の相違点、類似点を確かめる。

方法および対象 26項目よりなる質問紙による調査法（自宅記入）を用いた。フランスにおける調査の実施期間は1978年6月から1979年6月で、対象はパリのEcole Alsacienne, Institut Social Familial et Ménager, およびLycée Classique et Moderneの在校生の父親453名。日本の調査実施期間は1978年5月から7月、対象は東京都のA学院初等、中等、高等部の在校生の父親687名。

結果と考察 I 日本の父親の方が日常生活の規律、社会的行動の面でフランスの父親よりきびしい態度・行動をとっている。しかし反応の全体を分析した結果、躰けの実効性を期待し得る養育行動を結論することはできない。II 躰け一般に就いては、(a) 両国ともに、躰け熱心は母親であるが、(b) 実際にきびしいのは、フランスは父親、日本は母親であり、(c) 両親のあるべききびしさについては、フランスは＜両親ともにきびしい＞ことが過半数を占め、日本は＜母親＞次いで＜父親＞の順になり、＜両親ともに…＞は全体の半にすぎない。両親の養育態度の一致性という視点からみれば、両親ともに同じきびしさを求める日本の父親より、好ましい態度といえる。III 子どもに望む将来像、継承させたいもの、父親のイメージ等の回答結果は日本・フランスともに現代社会の親子関係のあり方としての子どもの存在意義を反映している。IV フランスの父親は30代が特に躰にきびしい態度で、日本では年代別の相違はみられない。